第３２５回くらしの植物苑観察会　令和８年１０月２４日（土）

「くらしの植物苑から学ぶ縄文時代の植物利用」

工藤　雄一郎　学習院大学国際文化交流学部　教授

狩猟採集民である縄文時代の人々は，生活の中で多種多様な野生植物を利用していました。食料となるもの，道具の素材となるもの，建築土木用材となるものなど，その用途は様々です。こうした植物利用の実態は，植物質の資料がよく残っている低湿地遺跡の発掘調査の進展によって明らかになってきました。

例えば，クリは東日本の縄文人が最も重要視していた木の一つです。秋に果実を集めて食料とするのは当然として，乾燥貯蔵して冬を越えるための保存食にしており，また縄文時代中期頃の人々は集落周辺でクリを栽培していた可能性も考えられています。竪穴住居にはクリの木材が圧倒的に多く使用されています。また，三内丸山遺跡では縄文時代中期末に，直径 1m ものクリの巨木を使った 6 本柱の建物跡が見つかっています。縄文時代晩期に北陸を中心に作られた環状木柱列にもクリが使われました。

日本列島にはダイズやアズキの野生種が存在しています。ツルマメやヤブツルアズキという植物です。これらの植物は縄文人に古くから利用されていましたが，これらのマメ類ものちに栽培が行われ，縄文時代中期には栽培ダイズ，栽培アズキと思われるような大型化した種子も見つかっています。縄文人は単純な狩猟採集民ではないことはもはや明らかです。







縄文時代の遺跡からは，日本列島には本来は自生していない様々な外来栽培植物も見つかっています。アサやヒョウタン，エゴマ，シソ，ウルシはその代表例です。最近，私は外来栽培植物がいつ日本列島に入ってきたのかを明らかにするため，これらの資料の放射性炭素年代測定を進めており，アフリカ原産のヒョウタンや中央アジア原産のアサは，遅くとも縄文時代草創期末から早期初頭の 1 万 1000 年前ごろにはすでに日本列島に存在していた可能性が高いことがわかってきています。中国の内陸部から東北部が原産と考えられるウルシは，福井県鳥浜貝塚で 12000 年前をさかのぼる資料が見つかっており，その渡来時期は謎に包まれています。

くらしの植物苑には，縄文人が利用していた植物が数多く植栽されています。私は 2009 年から 10 年間歴博におりましたが，その際にくらしの植物苑を歩きながら縄文人，弥生人の植物利用を知ることができる２つのワークシートを作りました。当日は苑内を散策しながらこれらの植物を観察し，縄文人の植物利用を考えていきたいと思います。

・・

次回予告　第326回くらしの植物苑観察会　　令和８年１１月２８日（土）

「菊の栽培書を読む―菊の防虫対策―」

平野　恵氏（東京都台東区立中央図書館）

１３：３０～１５：３０　　　博物館本館　ガイダンスルーム　申込不要

※博物館ガイダンスルーム開催となります。ご注意ください。